

総合的地域研究の概念

1. 研究組織

研究代表者：高谷 好一（滋賀県立大学人間文化学部・教授）

研究分担者：応地 利明（京都大学東南アジア研究センター・教授）

掛谷 誠（京都大学大学院人間・環境学研究科・教授）

松原 正毅（国立民族学博物館地域研究企画交流センター長・教授）

家島 彦一（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・教授）

阿部 健一（国立民族学博物館地域研究企画交流センター・助手）

2. 研究のねらい・目的

地域の全体像・イメージを明確に提示することが目的である。我々はそれが課題として掲げた総合的地域研究の一義的目的であると考えている。

世界にはさまざまな地域が並存している。一つ一つの地域は、それぞれ固有の生態基盤に立脚し、歴史的に独自の価値観・世界観を育んできた。地域が異なればそこに住まう人々の生き様も異なる。地域とは単に空間的な広がりではなく、共通の考え方をを持った人々の集合体とも考えられる。

ただ、地域と地域の間には画然と峻別できる境界があるわけではない。地域の時間的・空間的伸縮により、境目は不鮮明となるのが常である。形をなさない地域も存在し得る。地域を確定することは、総合的地域研究においては目的でも手段でもない。むしろ操作概念としての地域は曖昧なままにしておく方がよい。重要なのは、個々の研究者が知的枠組みを地域に据え、視点を「地域」という水平に置くことである。

今日、世界はあらためてグローバルな一つの纏まりとして捉え直されようとしている。地域を飛び越えて世界の行く末が論議されている。価値観を共有し、全人類的な共通の目的に向かうことが、現在世界の抱える問題群の唯一の解決策、あるいは解決への捷徑のように考えられている。それに現実に、世界のここかしこで、政治・経済・文化のあらゆる局面において、グローバル化は進行しつつある。

すでに述べたように世界は本来的に均質ではない。多様な地域の集まりである。時には互いに相容れないような世界観を持つ地域が隣接することもありえる。自己主張の強い外向きの地域もあれば、ひたすら受身に徹する地域もある。こうした歴史に培われた地域個性への深い理解なくしては、世界の将来像を描くことは不可能である。それぞれ地域は他地域と無関係では

存立し得ない。運命共同体として世界をわかつ「地域」、その個性を一つ一つ抉り出し、世界と地域の共存の道を探ることを地域研究の一つの到達点として考えて行きたいと思っている。

3. 平成8年度の研究経過

平成6年度から、「地域間研究の構図」という一連の研究会を行ってきている。東南アジアをピボット地域とし、地域と地域を「比較」することにより、地域の輪郭を際立たせようとする試みである。6年度は南アジアと中東とを比較の相手としてとり上げた。7年度は中国とアフリカを対象地域とした。そして8年度はヨーロッパとの比較をし、最後に「地域間比較のあり方」と題して、日本との比較を試みた。

ヨーロッパとの比較は「地域間研究：東南アジアとヨーロッパ」として、1996年9月14日と15日に行った。川勝平太（早稲田大学）、陣内秀信（法政大学）、高谷好一（滋賀県立大学）が発表をし、角山栄（奈良産業大学）、永沼博道（関西大学）、渡辺尚（京都大学）、木村雅昭（京都大学）の諸氏がコメントをした。

「ヨーロッパから東南アジアへの視座」と題した川勝平太氏は最初に梅棹忠夫の「文明の生態史観」と高谷好一の「世界単位」論を批判した。これらはいずれも生態を重視しすぎたものであり、したがってスタティックに過ぎる。実際はもっとダイナミックな歴史展開があったとしなければならないとした。「人間は棲み分けの世界の破壊者」である、と同氏は主張するのである。同氏はさらに、この地球上には土地の私有にこだわる一群の人達と、私有にはほとんどこだわらない人達がいるとした。前者の典型はイギリス人であり、後者の典型は東南アジアの人達だという。近代というのは土地私有制の拡大という形で広がっていったから、そういう視点で東南アジアとヨーロッパを比較すると面白い比較ができるというのである。

川勝氏はイギリスは貧弱な土壌しかなく、土地生産性が低いから、食糧確保のために土地私有へのこだわりが出てこざるを得なかったという。また冷涼なこの気候下では、食料以外の作物も限られていた。多くの物産は外国に頼らなければならなかった。こういうことから、海外に植民地を求めるということは避けられないことであったという。

歴史的にこのことを同氏は次のように述べている。イスラーム勢によって、アルプスの北に閉じこめられていたヨーロッパは、そうした物産のほとんどを、イスラームの商人の手を通じてしか得られなかった。これが中世を通じてのヨーロッパの状態だった。しかし、レバントの海戦の勝利（1571）の後、はじめてこの経済構造が変わった。クリスチャンが通商権を握り、以後、ヨーロッパは急速に発展するのである。

発展し、人々が豊かな生活を求めるようになると、ますます多くの海外物産を求めるようになった。そうした海外物産の中で、最も大量に求められたのは綿と香料であった。前者はインドから、後者は東南アジアから求められていた。茶やコーヒーもアジアから輸入された。こうした輸入品のおかげで、イギリス人の生活はすっかり変わった。この点に注目して、川勝氏は「物産複合」の変化に注目することの重要性を説いている。貧しいが故に私有権にこだわり、植民地を獲得したイギリスは、こうして新たに「物産複合」を作り出し、かくして、生態を越して発展していった。これが近代だと同氏はいうのである。

一方の東南アジアはこれとは全く違った。ここには豊かな地が広大に広がっていたが故に、誰も土地占有などには興味を持たなかった。ただ、その中である種の経済活動だけは極めて活発に行われた。ここは森林物産が豊富にあり、すぐ近くには中国、インドという巨大な人口集中地域があったからである。それに、海を通じてのイスラーム商人の到来も頻繁であった。だから経済活動が活況を呈していたのである。ただ、その経済はケオティックなプロト経済であったという。こういうケオティックなものが、ヨーロッパ勢力の到来によって秩序ある合理的な世界経済に組み入れられて行ったのが、東南アジアの近代化であったとした。

「地中海世界から東南アジアへの視座」と題した陣内秀信氏は最初に、狭義のヨーロッパと地中海世界の比較をした。生態的にいうと、ヨーロッパは森と町との組み合わせだが、地中海は砂漠と町との組み合わせだという。そして、そこに住む人間に目をつけると、前者が個人主義・人間中心主義・普遍主義的であるのに対して、後者はもっと他人との結びつきに気を配り、情緒的であり、かつ弾力的、ネットワーク的だという。

こうした地中海でも、イスラーム地帯にはいると、町のレイアウトも、人々の生活の仕方にもまた一段と非定形、弾力的なものが目立ってくるという。町のレイアウトに関しては次のようにいっている。

「アラブ、イスラーム都市だと、トルコの都市もそうであるが、中心部に大モスク、バザール、これらは公的セクターである。しかし、公といってもヨーロッパのように自治体が公権力ではなくて、商業である。これは非常に重要である。商業が都市の中でどう扱われるかというのは大変重要で、イスラームの場合はアドミニストレーションというのは自立したものがなく、むしろ宗教と商業がくっついている。これらが中心の公的セクターを作っている。その周辺によそ者が入りにくいように迷宮化してそこを住宅地にしている。そこが女性と家族の世界である。その間にしばしばトンネル、ゲートを設けて、結界、仕切りを入れる。これもチュニジアで徹底的に行われていて、よそ者が入ってこないようにするわけである。こういう公的空間

と私的空間の区分けが非常に上手である。ヨーロッパではギリシャのアゴラから始まって、非常に明快に広場、つまりそこでシビルな権力の中心を作っている。視覚的にアイデンティティを作り出した。ところが、イスラームの方は公権力が景観の上で表れるということはしなくて、むしろネットワークの中に沈んで隠れている。ですから、イスラーム都市というのは極めて機能的で、実利的で、快適性を追求する非常に勝れた、ただ近代の価値観にはなかなかのってこないような都市なのではないかと思われる。」

人々の生活については次のようなことをいっている。

「それからスファックスというチュニジアの町に行って、調査したが、面白い話を聞きました、都市の中に住んでいる人達は、漁民、農民、職人、商人もいるが、みんな複数の職業を持っていて、全家族が田園の中に農場を持っている。季節によって農業をやり、それ以外の季節には商業をやったりする。漁民も農場を持っている。」

このように地中海世界を描写したうえで、陣内氏はイスラームの入っている東南アジアには地中海と共通するところが多いのではないかという推察を述べた。もちろん高温多湿な東南アジアでは地中海世界のような中庭を持った石造りの家などは出来ないだろうが、バザールを中心とした町のレイアウトや、流動的、ネットワーク的な人々の生活の仕方などには共通したものが認められると述べた。

高谷好一は「東南アジアからヨーロッパへの視座」と題したが、ヨーロッパに関してはもっぱら川勝報告に同意し、むしろ東南アジアの構造についてひとつのモデルを提唱し、そのうえで特に、川勝報告で指摘されたケオティックな経済圏というものの実態を論じた。

モデル化した東南アジアではASEANを重視した。東南アジア全体の成り立ちは、中央にASEANという海域社会が存在し、その外縁にベトナム、ビルマ、ジャワという三つの農村社会があるとした。東南アジアの中核は海域社会ASEANであるという認識である。

そのうえで、海域社会は詳しく見ると二つの部分からなるとした。大きな積み出し港のバンドルと小さいマレー人の集落カンボンである。バンドルは多くの異国人を抱えた、いわば域外への門戸である。しかし、カンボンの方はより在地的、東南アジア的なものである。このうちバンドルは確かに川勝氏が指摘するように、近代の再編の中で変容していった。しかし、カンボンには変容はあまり強く及ばず東南アジア的なものがずっと存続した、というのが高谷の主張であった。そして、それは決してケオティックといった簡単な言葉では片づけられない、独自の価値体系を持ったものであった、と主張した。

「私の感じでは彼らは強烈な男の美意識、男の美学を持っている。つまり、喧嘩が強いこと

である。喧嘩が強いといっても、単に体が大きく、剣術に優れているというだけではなく、彼の持っている剣が勝手に飛んで行って相手を殺してくれる。そういう超俗的な力を持ったものが強い、と考えている。男は森の中で修行に修行を重ねて、自分を清く、強くする。その結果神にかわいがられる人間、神から見て美しい人間になる。それが強い、ということである。神が加護してくれるからそうなのである。そういう美学と哲学を彼らは持っている。一方横のつながりはどうなっているかというと、神にかわいがられる序列がちゃんとある。一番かわいがられるのが横綱で、その下にランクが決められている。彼らは定着しているものではなくて、動きまわっているので、常に行った所、行った所で、番付ができる。それこそ二人関係の社会というか、ある種の一時的な関係ができて、それが親分、子分になる。これらは、大文明が持っている、あるいはヨーロッパが持っている堅固で定式化された社会の仕組みとは全く違ったものである。それでは秩序がないじゃないかといわれるかも知れないが、そうではない。カミの世界を巻き込んだルールがある。極端にいうと東南アジアはそんな深い意味のある世界である。」

このあと家島彦一氏の司会で総合討論に入った。議論は、世界システムを重視しそれを肯定的に見る立場と、土地の固有性、個別性を重視する立場とに分かれてかなり白熱した。特にこの両者では近代の評価に対する違いが明瞭にあったし、いわゆる発展に対しても違ったイメージを持っていたからである。全員が合意に達するということはできなかったが、お互いに地域認識を深めるには大いに役立ったセミナーであった。

地域間研究の最終回は「地域間比較のあり方—東南アジアと日本をめぐって」と題してB01班と合同で1997年2月23日に行った。話題提供を高谷好一が行い、河上倫逸（京都大学）、園田英弘（日文研）の二氏がコメントを行った。

高谷は今までに明らかになった東南アジアの地域構造を基礎において考えてみると、日本はどのように考えられるか、という視点で話題を提供した。そのために話題を二部に分け、最初に東南アジアの構造を示し、それに続いてその北に接している日本はどのように考えられるかと論を進めた。

まず東南アジアであるが、これは海の世界と陸の世界からなるとした。そして、海の世界は maritime network を作る場であり、陸の世界は terrestrial kingdoms を作る場であるとした（図参照）。前者は熱帯物産は豊富だが、瘴癘の地であり、したがって定着的な農村に発達し得ず、そこはもっぱら熱帯物産の搬出と貿易の場となるわけである。一方、陸には三つの農業適地がある。紅河デルタ、ジャワ火山山麓、上ビルマである。これらの所は気候と土壌に恵

まれ、早くから農耕地として開け、したがって社会を熟成させ、王国を作ってきた。これが東南アジアの構造である。

次に日本を考えている。日本を考えるとときにはどうしても中国を無視するわけにはいかない。中国に焦点を当てると、東アジア周縁は図に示したように模式化することができる。大中華があり、それにくっついた恰好で三つの小中華、すなわち朝鮮・韓国、日本、ベトナムの三つがある。これらの三つは大中華を先生としながら、しかし、それに反発し、独立を克ちとり、独自の世界を作ってきた地域である。

ところで、これらの三つの小中華世界は大中華から峻別しうらというレッテルを用意したのであろうか。大中華を儒教・漢文化世界ということにすると、これらの三つはそれぞれに、両班群（朝鮮・韓国）、みやこ（日本）、反骨（ベトナム）とラベリングしうると高谷は提唱した。



図 世界単位的に見たときの東南アジアと日本

とはいえ、東アジアは決して陸の「大中華」だけで済まされるべきものではない。ここには東シナ海・南シナ海にわたって広がる「海中国」世界とでもいうべきものがある。それは、先に見た、東南アジアの海の世界に極めてよく似た性格を持つ maritime network の世界である。歴史的に見てみると、江戸幕府が始まるまでは、この「海中国」は活力が極めて高く、また範囲も広く、日本の西半分をこの「海中国」の中に含んでいた。高谷は日本がひとつの小中華として、独自の世界をなすようになるのは江戸期以降だと主張した。

高谷はこうして、この部分のアジアに関しては次のようなイメージを提示し、同時に参加者の前に問題を提示した。

- 1・アジアのこのあたりには、最初、「大中華」と海のネットワーク世界があった。
- 2・やがて、農業適地には、terrestrial kingdoms というものが析出してきた。
- 3・それらの terrestrial kingdoms は巨大な「大中華」の存在があって、それぞれに「小中華」とでも称すべきものを作った。

としたうえで、それぞれの小中華は、皆それ自体の生態や文化的背景があって、独自の性格を持つようになったとし、その独自性を仮に key words で表すとしたら、それぞれに次のようになるとした。朝鮮・韓国＝両班群、日本＝みやこ、ベトナム＝反骨、ジャワ＝劇場。

高谷が提起したこの問題は、仮にこのような筋道で考えてきた時、日本に対する key word はこれで的確なものなのだろうか、ということであった。換言すれば、日本を創りあげた力は本当は何だったのか、ということであった。

コメントに立った河上倫逸氏は、自分は普遍主義の立場に立つ者だから発表者の分析視点とは基本的な所で違いがあるのだが、という前置きをしたうえで、発表で欠けていた三つの点を指摘した。第一は、分析には「永遠の現在」とでもいった見方があり、歴史的な視点が欠如している、歴史的経過をもっと考慮に入れるべきだということであった。第二はそうした歴史的展開の中では、単に生態や地域社会といったものだけでなく、もっと大きな軍事、経済、法、言語といったものの力を考える必要がある。それらを軸に地球世界が作られるという可能性も見逃してはならないとした。さらに、第三点として、現実には国家があり、実定法がある。現実には存在しているそうしたものをもっと重視する必要があるとした。

高谷が問題提起で日本の key word を考えるとしたら、それは「みやこ」だとしたのは、『〈みやこ〉という宇宙』（園田英弘、1994、NHKブックス）を意識してのことであった。それで、高谷の要請もあり、園田氏のコメントはもっぱら「みやこ」を主題にして行われた。「みやこ」がもつ王宮性、都会性、首都性についての説明があった。それに続いて、もし、

「日本を創りあげる力」ということになると、天皇制というものがもうひとつ考えられねばならないのではないかといったことも議論された。

園田氏は、もうひとつ、地域研究のあり方ということに関しても意見を述べた。日本人が東南アジアという外国を研究する場合と違って、日本人が日本を対象にする時、どういうジレンマがあるかということ述べたのである。同氏は自分は日本を対象にして研究をしながら、なおかつ「nationalistic にならないように」というのを基本的な姿勢としているという。「日本にあるものは世界にもある」というのが大前提であるともいった。地域研究とは何なのかということに関して、研究者のスタンスに微妙な差のあることを参会者は感じ、この後このことも議論になった。

河上、園田両氏のコメントのあと、立本成文氏の司会で総合討論に入った。

地域間研究シリーズには入らないが、B03班では別に二つの研究会を持った。いずれも、他の世界との比較という視点で見た時、東南アジアは結局どのように見えるのか、ということの問題としたものである。それは次の二つの研究会であった。

研究会1：「東南アジア：生態論理の世界」

話題提供者：古川久雄

日時：1997年1月8日

古川氏は機能論理の中国、宗教論理のインド、神学論理の西アジア、機械論理のヨーロッパなどに対比して、東南アジアは生態論理の世界として捉えられるとした。このことに関しては、特に立本成文氏が見事に問題を整理した。これに対して、生態論理ということの内容は何なのか、ということで議論が展開した。その結果、農業の欠如する熱帯多雨林多島海は「通過型の生態論理」が貫徹している世界と考えてよいということになった。

研究会2：「大陸部東南アジア」

1月8日に行った「東南アジア：生態論理の世界」では、東南アジアの最も東南アジアらしい部分が島嶼部であるということで、話はもっぱら島嶼部に限られた。しかし、それでは片手落ちということになって、それを補う形で行ったのが、この研究会であった。二人の話題提供者を得て次の要領で行った。

話題提供者と話題：

海田能宏「東南アジアの〈野の世界〉」

向井史郎「人口・環境・資源」

日時：1997年1月31日

海田氏と向井氏はともにバングラディッシュを素材に選んで話した。前回、島嶼部には「通過型土地利用」しかなく、農村がなく、人々はいわゆる「通過型の生態論理」で生きている、と結論したのに対して、両氏はバングラディッシュには「村」があり、小農の世界があり、いうなら「積み上げ型の生態論理」に生きているとした。そして、向井氏は、人口密度が高くなると、やがて島嶼部も大陸部と同じように小農の世界に変質していく可能性があるかも知れないとした。

こうした発表に対しては二つの点で議論が関わされた。第一は、もし東南アジア大陸部の特徴を「小農の世界」とすると、それはインドや中国、日本とどう区別するのか、ということであり、第二は、島嶼部はたとえ人口密度が高くなったとしても、やはり「通過型」が続き「積み上げ型」にはならないのではないかという議論であった。

結論としては、東南アジア大陸部は結局は中国のような大陸本体と東南アジア島嶼部との間にある漸移帯であるとし、もしその特質を一言でいうなら、やはり「積み上げ型の生態論理」に生きる世界、ということになろうかということになった。

4. 研究の成果とフロンティア

B03班は研究を進めるための手段として地域間研究というものを開発し、それを推し進めてきたが、それは有効な手段であったし、この重点領域研究のひとつの成果であったといつてよいかと考えている。

地域と地域の比較ということは、とりもなおさず比較の単位として、自分の対象としている地域の全体像・核心を抽出する作業を地域研究者に要求する。相手地域の特質を理解しようとする前に、自らが対象とする地域の理解が必要となる。

地域研究がそれぞれのディシプリンによる詳細な情報の集積にしか過ぎないのであるとしたなら、地域間研究はさほど意味をもたない。分析の手段としては比較はおこなうだろうが、とくに「地域」と「地域」の比較を持ち出す必要はない。しかし地域研究の目的を、単に地域の理解にとどまらず「ポスト・モダンの新秩序を創り出すためのもの」としたとき、普遍的なるものに抗して地域の尊厳を認め、地域と地域の共存を図るための学問としたとき、地域間研究は極めて重要な地域研究の手法となる。世界に存在する地域を指定し、そのさまざまな価値観を理解することが、地域の共存をはかるための前提条件であるからである。

分担者の一人応地の言葉を借りれば、われわれは「地域間研究の必要性和有用性の確信犯」
となったことになる。

5. 今後の計画

今までに南アジア、中東、アフリカ、中国、ヨーロッパ、日本を比較の対象として6回の地域間比較をおこなってきたが、この先は、可能ならばこれらを全て総括して地球世界の中での東南アジアの位置づけと、その特徴をはっきりさせたいと考えている。このためには、今までにこの研究に参画して下さった人達に再度参集してもらうか、あるいはB03班の何人かが、各地域の代表的な方々を歴訪して全体像を築き上げる努力をするか、どちらかの方法で研究を今一歩進めたいと考えている。

6. 研究業績（平成8年度発表）

高谷好一

- 「〈世界単位〉から世界を見る」京都大学学術出版会、1996.
- 「多文明世界の構図」中公新書、1997.
- 「〈想像の共同体〉論」「東南アジア研究」34(1):307-326, 1996.
- 「文化としての工学」「人間文化」vol. 1(滋賀県立大学紀要), 1996.
- 「地域の時代が来る」「滋賀の経済と社会」No. 80, 1996.
- 「エリアスタディの現状と課題」「地誌研年報」5(広島大学), 1996.
- 「私の地域間研究」「総合的地域研究」12:3-5, 1996.
- 「車窓学派の前歴」「総合的地域研究」13:36-37, 1997.

応地利明

- 「絵地図の世界像」岩波新書、1996.
- 「地誌研究と地域研究—認識論的ノート」西川治編「地理学概論」(総観地理講座1)所収、朝倉書店、1996.
- "Survey of Farming Method in West Africa and South Asia - Presentation of Collected Informations / Recherche sur les methodes agricoles dans l'Afrique d'Ouest et l'Asie de Sud - Presentation des Informations Recueillies." In Ohji, T.ed., Comparative Study of Millet Cultivation between Sahel and Deccan / Etude Comparative de la Culture des Mils entre Sahel et Deccan, Kyoto University, 1996.
- 「『地域』間研究の海へ—地域研究の現段階—」「総合的地域研究」12:14-16, 1996.

「マリ国におけるミレット農耕形態の諸類型と分布」川田順造編『ニジェール川大湾曲部の自然と文化』所収、東大出版会（近刊）。

掛谷 誠

「焼畑農耕社会の現在—ベンバの村の10年」『続自然社会の人類学—変貌するアフリカ』（田中二郎・掛谷誠・市川光男・太田至編著）アカデミア出版会、1996.

「フロンティア世界としてのアフリカ—地域間比較に向けての覚え書き—」『総合的地域研究』12:10-13, 1996.

松原正毅

「裸眼の思索者」『司馬遼太郎の登音』（中央公論九月号臨時増刊号）、1996.

家島彦一

「イブン・バットゥータ 大旅行記1」訳注（東洋文庫601）平凡社、1996.

「旅と出会い—地域間研究の原点を求めて—」『総合的地域研究』12:6-9, 1996.

阿部健一

「熱帯多雨林から地域研究へ」『総合的地域研究』13:8-9, 1996.